

タイトル	創世神話の系譜：古代メソポタミアの資料から(3)
著者	桑原，俊一
引用	北海学園大学人文論集，39：175-197
発行日	2008-03-00

創世神話の系譜

— 古代メソポタミアの資料から (3) —

桑原俊一

キーワード：宇宙観，創世神話，一神教，古代メソポタミア

4.5. 人間の創造

メソポタミアの宇宙開闢説は、(1) 混沌とした胎芽期の記述‘はるかなる遠い日に……’にはじまり、(2) 天と地の分離と結合（結婚）を経て、(3) 神々の誕生と万神殿が形成され、(4) 世界の創造に秩序が与えられる。これに引き続き (5) 神々のために労働をする人間の創造が主題となる。前号では (1) から (4) に至る神々の世界を検討した。

本稿では (5) を主題としたメソポタミアに固有な人間観を課題として検討する。メソポタミアの世界観によれば、本来世界は神々の活動する場でしかありえなかった。下級の神々は天上の神々に奉仕し、神々の神殿造営はむろんのこと、日々怠りなく神々の食卓を準備するために、パン作りと家畜の飼育は欠かせない労役であった。そもそも雨の極端に少ないメソポタミア地方では灌漑のための運河の掘削と用水路の確保、つまり水の管理は必須な社会基盤であったのである。それゆえ最高神としてのアンを筆頭に 2000 柱¹ともいわれる神々を支えるため、下級の神々の働きは神殿の造営と食料の確保という過酷な労働を強いられていた。人類誕生以前の神々の世界はまさに人間の社会と変わるところはなかった。むしろ古代メソポタミアの人々にとって、彼らの生活は彼ら以前の神々の世界の生き写しであったのである。メソポタミアから出土する粘土板テキストが語る神々の世界と宇宙の開闢はあらし以上の素描を前提にしている。

本稿では人間の創造に関わる代表的文学としてシュメール語テキスト

『エンキとニンマハ』、『鶴嘴の創造』とアッカド語テキスト『エヌマ・エリシュ』、『アトラ・ハシース叙事詩』を取り扱う。メソポタミアの粘土板文書は3000年期と2000年期に集中して出土する。南部メソポタミアに開花したシュメール文化圏には北西地域からセム系民族が早くから侵入し、文化的接触と融合の存在が認められている。2000年期になるとメソポタミアはセム人の支配する地域になるが、文化的にはシュメール語が書記法上の主要言語として維持された。メソポタミアの書記の伝統はこうしたメソポタミアの言語環境を如実に示している。しかしながら2000年期以降のシュメール語テキストは基層を保持しながらも、セム系民族の言語・文学的改変を受けなかったものはなにひとつ存在しないといってよいだろう。こうした言語環境を前提に考慮すると、事実上テキストの言語的相違によって文化間の問題を議論することはあまり生産的であるとはいえない。神話的テキストの取り扱いをメソポタミアという地域に限定し、さらに創世神話を主題とするわれわれにとって、取りうるよりよい方法はテキスト自体を共時的に把握し、主要なテーマの特徴を類型的に抽出することにある。

4.5.1 『エンキとニンマハ²』

上述したように本稿では、テキストに少なからず欠損や欠落がある場合でも、できる限り推論による補充よりもテキストそれ自体に忠実に考察し検証を進めることとする。したがってしばしば意味不明な文脈にも遭遇することもある。最初に取り上げるテキストは『エンキとニンマハ』における人間観である。例によって多く欠損・欠落があるため、このテキストの全体像を的確に把握することは困難である。しかし一言で言えば、できるはずもないにもかかわらず、女神ニンマハは何とかしてエンキと競い合い、同等であることを証明しようとする物語である。このテキストの最初の校訂者、A. ベネトによれば内容は6つの部分から構成される：(1)序 1-8行、(2)人間の創造 9-43行、(3)神々の祝宴と6つの被造物の創造 44-79行、(4)不可解な人間の創造 80-102行、(5)エンキとニンマハの対話 109-139行、(6)結び 140-141行³。われわれの主題と関係する

部分は人間の創造に関わる部分である。序の部分はメソポタミア文学において原初史を書き起こす常套句的文体ではじまる。

天と地が「……」されたかの日々に、
天と地が「……」されたかの夜々に、
天命が定められたかの年々に、(1-3行)⁴

アヌンナ神⁵をはじめ神々が生まれ、女神たちは結婚のため天と地にそれぞれ配置されたのち、子をもうける。次の行はテキストの欠損が多いが、神々はパンを焼き、食卓の準備をする様子が窺われる。物語はここから一転して、現実の世界へ向かう。

偉大な神々は監視の任務に就き、若年の神々（下級神）は畚を担いだ。
神々は運河を掘削し、その泥土⁶を積み上げた。
神々は粘土を踏みつぶし、（過酷な）生活について不平を言いだした。
(9-11行)

神々のなかに公然と不平を口にするものがあらわれた。この不平にこそ人間誕生の理由があったのである。北西メソポタミア（アッシリア地方）を除けば、温暖な季節は巡ってこない。乾季には気温は摂氏50度にも達する。灼熱と乾燥の大地がこの地を焦がす。砂嵐の襲来は頻繁に起こった。大河のほとりに拓けた諸都市とて例外ではなかった。ポリス化した都市文明は神殿を基盤に開花したが、神殿の造営には膨大な量の煉瓦作りが必要であった。神々の祝宴には各種のパン料理が並び、山羊から作られたチーズや羊の肉も振舞われた。このような自然環境におかれた農耕経済は、メソポタミアの場合、確かに過酷な労働を強いられた。とりわけ運河の掘削と水路の管理が食料の確保に必要不可欠であったからである。

メソポタミアの神話において人間に最も関与する神がエンキ/エア⁷である。このテキストによると、エンキだけが唯一神々の世界で労務から逃

れ、眠りに陥っている。

その時、計り知れない知恵をもつ者、全ての偉大な神々の創造者、
エンキは、深きエングル⁸において、深淵の水中にあって、その只中を
いかなる神も決して見ることはないところで、
寝台に横たわり、眠りから目覚めようとはしたかった。

神々は嘆いて言った。“彼こそがこの苦役を引き起こした張本人だ。”

(12-15行)

ナム⁹、原初の女神は、神々の嘆きに応え、エンキを目覚めさせることにした、そして彼こそ起きて、人間を創造するべきだ、と告げる。

エンキは母、ナムの言葉によって寝台から起き上がった。

助言を受ける部屋ハランクグ¹⁰で、彼は苛々して腿を打ち叩いた¹¹。

知恵者にして聡明なる者、天と地の管理者、どんなものの形をも創られる方が、(?) 子宮の女神を創造した。

エンキはそれらに腕を伸ばして、注意深く調べた。

そして、自ら計画したものを創られる方、エンキはその事柄について
慎重に考慮したあとで、

母なるナムに言った。

“母よ、あなたが計画した被造物は確かに存在します。その者に神々の
畚を担ぐ夫役を負わせましょう……”。(24-30行)

しかしエンキは任務をナムに委ね、指示を与える。彼女は助力者たちの手を借りて、アブズ/アプスーの肥沃な粘土の一片を手にし、それを千切り取って、形を整える。ニンマハは仲間のひとりであった。結局、彼女は重い労役を人間に負わせることに手を貸した。テキストには欠損があるが、その後エンキはナムとニンマハのために祝宴を催す。大いなる神々はエンキの知恵が褒め称えられる。エンキとニンマハは酩酊するほど酒に酔う。

ニンマハは自ら競争心を煽おり、他の創造物を造ろうと提案する。エンキは受けて立つのだが、ただし自分が彼らの運命を定めることを要求する。ニンマハは仕事に取りかかり、6人の人間を創造するが、そのいずれにも欠陥があった。その欠陥がはたしてどんなものであったのか不明な点が多い。

ニンマハはアプスーの覆いから粘土を手を取った。

彼女はそれを用いて最初の間を作ったが、彼はいっばいに広げた弱い手を曲げることができなかった。

エンキは、いっばいに広げた弱い手を曲げることができなかった最初の間を見て、

その運命を定めた。彼は彼を王の僕に就かせた。

2番目に、それ（粘土）から彼女は‘光を奪う’者、眼の見えない人間を創った。エンキは、‘光を奪う’者、眼の見えない人間を見て、

その運命を定めた。彼は彼に音楽術を分け与えた。

栄誉ある楽長として王の御前に座した。(58-64行)

ニンマハが創造した第3番目の人間は足に障がいをもつ者であった。欠損部分があるため、割り当てられた仕事は不明瞭ではあるが金属細工職人であろうか。4番目は尿を抑制することのできない人間であり、エンキは呪文を（唱え）ながら彼を沐浴させ、彼の体から悪霊ナムタル¹²を取り除いた。5番目は子どもを生めない女性の創造だったので、エンキは“王妃の家”¹³で働く任務を定めた。6番目の創造は男性としての生殖機能ないし女性としての生殖機能をもたない者であった。エンキは宮廷の宦官としての運命を割り当てた。結局のところニンマハは身体的障がいをもつ人間を造ってエンキを挑発するが、知恵の神エンキはことごとくそれらに仕事を割り当てたのである。

さらに物語は展開し、今度はエンキとニンマハの役割が交替する。エンキが人間を創造し、ニンマハがそれに運命を定めることになる。エンキは

2つ造ったようであるが、テキストの破損が甚だしく、文脈の不明瞭さは残されたままである。最初の創造物は多産の婦人か(?)。2番目にエンキが造ったものは異常な人間であった。

2つ目のもの、ウムウル¹⁴は頭を患い [……] 弱く、眼も弱かった¹⁵。命は終わりに近かったし、その命は退潮していた。肺も悪く、心臓も弱かった。臓腑も悪かった。(88-89行)

ウムウルはそればかりか手でパンを口に入れることさえできなかつた。肩も弱く、足も弱くなっていた。したがって自ら耕作地に歩いて行くことはできなかつた。しかしこの創造物が一体どんな人間を意味するのか確かなことはなにもいえない。墮胎された胎児なのか、あるいは老人であろうか¹⁶。

エンキはニンマハに言う。

“おまえの造った人間にわたしは運命を定めた。彼に食べるパンを与えた。

おまえは、私が創造した人間に運命を定め、彼はパンを食べることができよう。”

ニンマハはウムウルを見て、彼のほうを向いた。

彼女はウムウルに近づき、質問したが、彼は話すことができなかつた。

彼女は彼にパンを差し出したが、彼はそれに手を伸ばすことができなかつた。(92-97行)

ニンマハはエンキの創造したウムウルに質問をするが答えられず、座ることも横になることもできなかつた。パンさえ手に取って食べることもできない。もちろん家を建てることなどできるわけがない。ウムウルは明らかに無能な人間(乳児)として描写されている。ニンマハは驚愕しながらエンキにこう言わざるを得なかつた。

あなたが造った人間は生きても死んでもいない。わたしは彼を起こすこともできない。(101行)

このことばを聞いて、エンキはニンマハの創造した欠陥を持つ人間にもそれぞれに適切な運命を割り当て、パンを与えたと誇らしげに返答する。さらにエンキとニンマハの対話が続いていたと推測されるが、テキストはここで大きく欠落している。ニンマハはエンキに対する怒りが込み上げてきて彼を非難する。

いいかい、あなたは天に住んでいないし、地上に住まうことはない。

国を見るために現れることはない。

あなたが住まないところに、わたしの家は建てられる。あなたのことばは聞こえない。

あなたが住まないところに、わたしの市は建てられる。(123-125行)

ニンマハはエンキがアブズ/アプスーの深淵に閉じ込められていると主張する。一方で、ニンマハは最終的には建てられた家も市も滅ぼされ、子ども捕虜とされ、エンキの手から逃れられないと訴える。そこでエンキはニンマハに答える。

おまえの口から出ることばを誰がそれを変えることができようか。

[……] ウムウルをおまえの膝から取り去りなさい。(130-131行)

ニンマハの活動はさらに抑制され、エンキの陰茎が讚美される¹⁷。これに続く部分はテキストの欠落部分がはなはだしく、文脈の把握は難しいが、ウムウルによってエンキの神殿が建設されるに違いない、ということばで終わる。そしてこの神話のエピローグでは、ニンマハにはエンキとの創造をめぐる競い合いはできなかったのだ、と次のように締めくくられる。

ニンマハは偉大なる主エンキの対抗者たりえなかった。
父エンキよ、あなたの讚美は素晴らしい。(140-141行)

『エンキとニンマハ』という創造譚を概観してきたが、この神話からメソポタミアの人間創造に関わる幾つかの特徴を捉えることができる。

(1) 前理解として既に言及したように人間の創造は神々の「労働」と深く関与していることである。しかも本来この任務は神々の世界で役割分担されていた。偉大なる管理者たる神々は重い労働を下級の神々に押し付けていた。下級の神々の不平不満は深淵アブズ/アプスーに留まるエンキに向けられる。思慮深い知恵の神エンキはついに人間の創造に取り組まざるをえなくなる。神々の労役への不満は人間を創ることで解消される。この創造と労働の関係は以下言及する神話テキストのいずれにも観察できるメソポタミアに固有な特徴である。

(2) 人間創造に用いられる素材は肥沃な粘土である。深淵に神殿を築いているエンキは母ナムに人間創造を提案し、ニンマハとエンキは深淵を覆う粘土を千切り取って人間を創ることになる。水神エンキのアブズは粘土で覆われていたが、まさにメソポタミアの文化の基盤は粘土が深く関与していた。神殿の煉瓦はもとより、メソポタミア文化の固有性を決定づけた文字は粘土板に書き留められた。良質の粘土が人間創造にも不可欠の素材であったのである。

(3) エンキとの競い合いのなかで、ニンマハの創る人間は障がいをもってはいるが、エンキはそれぞれに仕事を(運命として)割り当てる。メソポタミア文学に特徴的な対論文学的修辞法¹⁸が施されているとはいえ、社会的視点から読み解くとすれば、メソポタミアの都市社会は当初より障がいをもつ人間にそれぞれ一定の社会的役割を与えていたことが窺われる¹⁹。

(4) ウムウル²⁰の存在である。ニンマハとの競い合いにおいてエンキが創造した人間はきわめて無能な乳児期の子供として描写される。多くの創造物語において人の場合初めに乳児が創られることは稀である。むしろ人間は

神の形にかたどられた成人として創造されることが一般的である。神人同形が基本形であるとすれば、ウムウルは稀なケースといえるが、人名ウムウル (u₄-mu-ul) の意味「わが日は遠い」から考慮する限り、メソポタミア文学に伝統的な英雄たちと同じ系統を維持しているといえる²⁰。

4.5.2 『鶴嘴の創造²¹』

メソポタミアでは運河や水路を確保するため何よりも掘削に欠かせない道具が必要であった。それが鶴嘴 (gisal) と畚である。この讃歌の前半部分に人間の創造が叙述される。物語は冒頭において宇宙の開闢を語る。エンリルは急いで大地から天を分離し、天と地の結び目 (ドゥル・アン・キ) に、大地のため裂け目を結び、そこから鶴嘴を生じさせて、これを讃美する。エンリルが造った鶴嘴は金銀で出来ていた。エンリルはこれを「肉が成長するところ (uzu-è)」としたのである。

エンリルは鶴嘴を讃えて歌った。

彼は鶴嘴で大地（肉が成長するところ）に穴を開けた。

彼が造ったその穴に最初の間が生じた。

一方で、国（の人々）はエンリルに向けて大地を切り裂いていた。

彼は人間（「黒頭人」）をしっかりと見つめた。

アヌナ（神々）は彼（エンリル）に近づき、

その手を鼻に置いて（挨拶した）。

エンリルのところは祈りによって宥められた²²。

こうして人間が誕生し、彼らに与えられた道具「鶴嘴」よって都市が築かれ、家が建てられる。続いて、神々による都市や神殿の建設と敵の撃破などが語られ、「鶴嘴」の使用が列挙され、最後は「鶴嘴」の讃美で終わる。

メソポタミアの場合、人類の起源に関しては粘土等を使用して人間を創造する創造型が主流である。しかしこの『鶴嘴の創造』神話は人間創造を植物が大地を割って芽を出す様子になぞらえている点で特色をもつ。つま

り人間が大地から植物のように出現するのである。以下取り上げる創造神話はアッカド語で伝えられる物語で、人類の起源神話としては創造型の類型に属するとすれば、『鶴嘴の創造』に見られるように人間が大地から生じる物語群は自生型に属するといえよう。自生型に属する神話群はほぼシュメール語伝承に限られることから、本来この自生型に属する物語は古いシュメール人の神話観念によるものと考えられる²³。

4.5.3 『エヌマ・エリシュ²⁴』(天地創造神話)

古バビロニア期(?)から前7世紀頃7枚の粘土板に約1000行にわたって書かれた天地創造神話である。粘土板はスルタンテペ、ニネヴェ、キシユ、バビロンの各地で発見されているが、その他の地方では発見されていない。このことは『ギルガメシュ叙事詩』が所謂オリエント一帯に流布していたことを考慮すると、『エヌマ・エリシュ』の文学的性格が明確になる。つまりこの神話ははじめから性格的に聖典に近く、バビロンの新年祭²⁵で吟唱されていた祭儀文なのである。春分の時期ニサヌの月の第4日夕刻に『エヌマ・エリシュ』は全編朗誦された。したがって殆どの部分は宗教に関わるとともに、メソポタミア文学に特徴的な文学的修辞法としての繰り返し部分が多く、この叙事詩はかなり単調である。しかし他方、豊富で威厳と輝きに満ちた語彙がちりばめられている。新年祭に使用された祭儀文であることから、聖劇としての性格を担っていた可能性がある²⁶。

神話は天地開闢の由来からはじまり、2柱の神、つまり地下深くにある原初の淡水をあらわすアプスーと、海の塩水を人格化したティアマトの争いを皮切りに、最終的にはマルドゥクがティアマトに勝利してバビロンに王権を確立する物語である。本稿の目的は人間の創造に関するテキストを検討することにあるため、仔細にわたる物語の叙述は割愛し素描にとどめる。

多くの天地創造神話のはじまりのように、時の扉が開かれて物語は展開する。

上ではまだ天空が命名されず、
下では大地が名づけられたかったとき、（1-2行²⁷）

アプスーとティアマトから四代の神々が生まれ、その神々はしだいに騒々しくなり、がまんがならないほどになる。アプスーは彼らの騒々しさを静めることができなかった。アプスーもはじめは、騒がしいティアマトの子孫たちに忍耐していたが、ついに彼らを滅ぼそうと計画するにいたる。「すべてを知るもの」エアがこの計画に気づく。エアは呪文をかけ、アプスーを深い眠りにおとすと殺害する。エアはアプスーから王冠と衣とを奪い取り、アプスーの住まいを自分のものとし、そこで妻のダムキナとともにマルドゥクを生む。マルドゥクはどんな神々よりとびぬけて優れていた。ティアマトはアヌが作ってやった風で遊ぶマルドゥクのために悩む。神々は密かに策謀をめぐらし、アプスーの仇を取るようにティアマトを説得する。そこでティアマトは恐ろしい怪物の軍団を作ることになる。彼は軍勢の指揮をとらせるため恐ろしいキングーを総司令官に任ずるとともに天命の書板²⁸を与えた。

ティアマトの軍勢の集結がエアの耳に入る。エアは祖父にあたるアンシャルと対策を立てる。エアとアヌを遣わしてティアマトに戦いを挑むがともに負けてしまう。そこでマルドゥクの出番がやってくる。マルドゥクはティアマトとの戦いに勝利した場合には自分が神々の主権者の座に就くことを条件としてだす。アンシャルは危険が迫ったことを知って、マルドゥクの要求を受け入れる。ラハムをはじめとする神々の会議を召集して宴会を開き、マルドゥクに天命の書板を授ける。

神々はマルドゥクにテストを試みるが、結果は彼に主権者、王に値するものと認めることになる。マルドゥクは大戦に向けて武器を整える。マルドゥクは一対一の勝負に挑む。ここから物語のクライマックスにあたる決闘シーンが展開する。ティアマトはマルドゥクに捕捉され、キングーも討ち取られる。彼の天命の書板は奪い取られ、マルドゥクはそれに自分の印を押し、みすから身につける。マルドゥクはティアマトを「干し魚のよう

に」二つに切り裂き、その半分を天として張り、天、空、アプスーをそれぞれの諸領地としてアヌ、エンリル、エアに割り当てる。

さらにマルドゥクは黄道12宮など宇宙の残りの部分を造る。そしてマルドゥクはティアマトの屍の残りから雲、霧と山を創り、さらに両眼からユーフラテス河とティグリス河の源とし天地創造を終える。

神々は感謝し、マルドゥクのために宴会をもつ。その席でマルドゥクはあらためて神々の敬愛を受ける。マルドゥクはその返礼として、バビロンを「偉大なる神々の家々」と命名し、市の建設を提案する。けれどもマルドゥクの仕事はこれで終わったわけではない。彼は心に思い浮かんでいた計画をエアに告げる。

わたしは血をまとめて骨を創りだし、
最初の人間を創ろうと思う。その名は人（アメル）だ。
わたしは最初の人間。人を創りだそうと思うのだ。
神々の夫役が（代わりに人に）課せられ、
かれらは心が和もうというものだ。（VI 3-5 行）

人間は神々の夫役を肩代わりし、神々がくつろぐために創られる。神々の復讐はキングーの屍に向けられ、人間はキングーの血から創られる。

かれらはかれ（キングー）を縛り、エアの前に [ひきすえ] て、
刑罰を科し、彼の血（管）を切った。
かれらはかれの血で人間を創っ [た]。
かれ（エア）は神々の夫役を廃止し、神々は自由な身となった。
（VI 31-34 行）

それからマルドゥクは神々を一つは天上の神に、もう一つは冥界の神に振り分けた。労役からの開放を得た神々はマルドゥクを讃え、先に彼が提案した「夜の休息の間」（神殿）を自分たちで造ろうと申し出る。神々のなす

べき最後の仕事として彼らは2年がかりでバビロンを建設する。立派な神殿エ・サギラとジグラットが完成する。マルドゥクは完成を祝して祝宴を催し、みずから神々の王であることを宣言する。そしてマルドゥクの50称号が唱えられてこの神話は終わる。

少し冗長になったが、『エヌマ・エリシュ』（天地創造の叙事詩）を概観した。『エヌマ・エリシュ』は7つの書板から構成されているが、本稿と直接関係する書板は第6の書板である。既に人間創造にかかわる神話の一部は引用した。この神話の英雄マルドゥクはティアマトとの一騎打ちに勝利し、ティアマトの屍から森羅万象を創造したのち、エアの助力を得てキングーの屍から人間を創る。人（アメル）は神々の夫役を肩代わりし、神々は労役から開放される。明らかにこの神話にも人間の創造は神々の夫役を肩代わりするためである、というメソポタミアの人間観が反映している。人間の創造に使用される素材はティアマトの將軍に任ぜられた神キングーの血管である。1柱の神キングーの頸動脈が切り裂かれ、羊のように屠殺され、その流された血から人間が創られる²⁹。

この神話には以下のような3つの特徴が観察できる。

(1) エアの介入が顕著である。エアは一義的には地下の清水の ABZU (アプスー)をつかさどるが、同時に創造神、運命を割り当てる神³⁰である。『エヌマ・エリシュ』の場合エアはマルドゥクの人間創造の計画を聞き、その計画を成就すべく助言を与える。エアは人間に深く関与する神としてその役割を果たしている。

(2) 神々の夫役から解放するための手段として1柱の神が殺害される。言い換えれば人間は神々の夫役を肩代わりするために創造された。この主題は次に取り上げる『アトラ・ハシース』叙事詩に顕著である。

(3) 人間は殺害された1柱の神の血によって創られる：メソポタミア文化を支えた経済は農耕と牧畜である。麦と羊・山羊などの家畜が主要な生産物であった。なかでも宗教上とりわけ羊の動物犠牲は儀礼に欠かせない。神々に捧げられる羊の血は生命を象徴していることは自明である。

4.5.4 『アトラ・ハシース叙事詩³¹』

この神話は3枚の書板1200行をこえる作品である。書板は古バビロニア期以前(前1645年)から新アッシリア期の前8～7世紀にかけて出土している。したがって新アッシリア期の『エヌマ・エリシュ』より古い時代に書かれた作品である。書き出しは、『エンキとニンマハ』と共鳴する主題、つまり天地創造以前の神々の世界において神々があらゆる労働を担っていたところからはじまる。

神々は人の代わりに
労役に就き、夫役を負っていたとき、
神々の夫役はあまりにも大きく
労役はあまりにもきつく、労苦があまりにも多かった。
偉大なアヌナキはイギギに7倍もの仕事量を負わせた。(I OBV
i 1-6行)

物語はより具体的に下級神イギギの夫役や労役を描写する。メソポタミアでは運河の掘削と水路の保全・維持管理は生命線であったのである。上級の神々を賄うためイギギたちは広大な耕地を開拓しなければならなかった。

神々は運河を掘り起こさなければならなかったし、
水路、国の命綱、を掃除しなければならなかった。(I OBV i 21-22行)

とてつもなく長い年月が過ぎ、もう疲れ果てた神々はエンリルに抗議することにした。エンリルは真夜中に脅かされ、怒りのうちに大いなる神々の議会を招集した。事態を収拾する方策として、メソポタミアの人間観にお決まりのように、エンキは子宮の女神ベーレット・イリー³²に最初の人間の原型を造らせ、つぎにその子孫を造らせて、人間たちに神々の労役を負わせることにした。人間創造の場面は次のようなエンキの言葉で始まる。

月の第1日目と第7日目と第15日目に
わたしは沐浴して浄められる。
ついで1柱の神は殺されなければならない。
そして神々は水に身を浸して浄められる。
彼(殺された神)の肉と血で、
ニントゥに粘土を捏ねあわせましょう。
そこで一つの神と一人の人間は、
粘土で一緒に捏ねあわされるでしょう。
われわれに太鼓の音³³を限りなく聞かせてください。
死霊³⁴を神の肉に留まらせてください。
彼(殺された神)の生きているしるしとして、彼女(ペーレット・イ
リー)にそのことを宣言させてください。
そして(殺された神)を忘れ去らせないように死霊をと留めさせてく
ださい³⁵。(I OBV iv 205-217行)

こうしてエンキの提案は神々の同意を得て、人間は創られる。時代が過ぎ
るにつれ、人間の数はしだいに膨大になった。それに伴い労働による騒音
もひどくなり、ついにエンリルはそれに耐えられなくなってしまう。

人間の騒音はあまりにも大きくなった。

彼らの騒ぎのために眠りがわたしを襲うこともできない。(II OBV
I 7-8行)

エンリルはまず疫病をはやらせ、次に旱魃とともに飢饉³⁶を送り込むの
だが、アトラ・ハシースがエンキから助言をうることで、人類はこの二つ
の難局を乗り越えることができた。標準版(SBV)と古バビロニア語版に
記述の食い違いがあるにせよこの災害はひどいものだった。標準版第2の
書板第5欄では、6年目になると人々は娘もそして息子でさえ食べ物とし
て提供される。残された者はほんの一部になってしまう。エンリルとエン

キの口論がつづく。そのあと、ついにエンリルは大洪水を起こして人類を絶滅しようとして決断する。一方エンキはアトラ・ハシースにエンリルの策略を明かし、方舟の建造を指示する。アトラ・ハシースとその家族そして鳥や動物たちは方舟に乗り込み恐ろしい大洪水の難から逃れることができた。

物語の終局部分は、およそ 58 行にわたるテキストの欠損に続いて、神々がアトラ・ハシースの捧げた犠牲を食べながら、たがいに叱責しあう場面ではじまる。断片的なテキストから読み取れるのは、エンリルの安眠妨害を避けるため、エンキは人間の生殖になんらかの歯止めをかけようと人口過剰問題に取り組んだらしい、ということである。エンキは人間の寿命を縮め、他方で幼児期に子供を死なせたり、ある女性を神殿娼婦のように子を産めない社会階級に閉じこめたりした。こうして叙事詩はエンリルの讚美で終わる。

この叙事詩における人間創造の特徴について考察してみたい。

(1) 下級の神々は長期間にわたる過酷な労働に耐えがたかった。神々はエンリルに激しく抵抗し、結局は彼らの肩代わりとして人間が創られる。メソポタミア文学にお馴染みの人間観である。神々に最も近いかたちで労役に服することがのぞまれていた。既に引用した部分、古バビロニア語版第 I の書板 205-217 行に明確であるように、1 柱の下級の神を殺害し、その肉と血を粘土に混ぜ合わせて捏ねて造った。

(2) エンキが選んだ 1 柱の下級神の名が知られている。古バビロニア語版の 223 行目にでてくるイラウェラ (Ilawela) がそれである³⁷。人間を意味するアッカド語はアウィール ((a)wêlu) であり、単なる修辞上の言葉遊び以上に、明らかに神と人との関係を意図的に示唆しているものと考えられる。イラウェラは一方で殺害された神 (ilu) であり、他方で理解力 (têmu)³⁸ をもつ存在である。彼はまた死霊エツェンム ((w)eṭemmu)³⁹ を宿している存在として創られる。人間は「神」、「理解力」そして「死霊」としての諸要素を兼ね備えている状態で存在し、下級の神々が夫役の役割を終えて開放された後、それらは人間に継承される、したがって労役を終えて人間の

死後まで残るものはただ死霊のみということになる。換言すればメソポタミアの人間観には死霊こそが人間の存在に理由を付与するものであった。人間にとって死霊の存続が神の不死性を保障する唯一のものであり、人間は死を迎えて、この世の労役から開放され、冥界で死霊として限りなく残るのである⁴⁰。その意味で死者供養は人々にとって最も大切な儀礼であった。

(3)人間の創造には2つの段階が認められる。まず第1段階としルッルー(Lullû)が造られる。これは原初の人間、「原型」、ともいうべきもので、生殖とは関わらない。しかしルッルーの創造は大母神ベーレット・イリーの役割として言及されていることから、母神の介在は疑うべきもない。たとえば原初の人間であっても人間を造る理由は神々に代わって労働を負わせることには変わらない。

次の段階は出産儀礼を伴う人間の再生産である。これは明らかに生殖による子孫たちの創造へと移行することを示している。古バビロニア版第1の書板255-259行とそれに平行する標準版によれば、以下のように叙述される。子宮の女神たちが集められ、エンキが粘土を踏み固める。出産の女神は呪文を唱えつづける。そして呪文が終了すると、彼女は粘土から14片を摘み取って、7片ずつ左右に置く。その間に煉瓦が置かれる。7の2倍の女神たちが受胎に関わるために集められていた。7人が男を産み、7人が女を産んだ。7組のカップルが誕生したことになる。煉瓦を置く行為は、煉瓦が人間創造の原型を象徴しているのかもしれない。形状が凸型で凸面部分が半円形をなす煉瓦は初期王朝時代の建造物に広く用いられており、それは妊産婦の腹部のふくらみに似ていることと関連するかもしれない⁴¹。

4.5.5 古代メソポタミアの人間観と創造

古代メソポタミアにおける典型的な4つの創造神話を概観し、その諸特徴を考察してきた。一言で言えばメソポタミアの人間観は人間の創造概念によって根底から規定されているといえよう。つまり人間の存在理由、な

ぜ人は存在するのか。なぜ人は労役に服さなければならないのか。このような疑問は厳しい自然環境下に置かれたメソポタミアの人々にとって本質的問であったのである。この困難な哲学的問いは彼らの人間観によって解決の道が開けられた。かつて人間が存在しない長い神々の時代があった。神々は下級の神々に重い労役を負わせていた。しかし長期にわたる労働はもはや忍耐の限界に達した。この限界点において神々の労働の肩代わりとして人間が創造され、神々は労働から解放される。はじめから人間の存在理由は「労働」理解と深く関わっていた。人間は結局神々へ奉仕するために創造されたのである。

人間は1柱の下級の神々が殺害され、その肉と血と粘土が混ぜて捏ねあわされて造られる。人間と神々との間には絶対的隔絶があり、例外的存在者—大洪水を生き延びた英雄—を除いて、神々の仲間入りは許されていない。しかし1柱の神が殺害されて人間が創造されたことで、人間に「理解力」と「死霊」が与えられる。血の通う肉体と共に智力と死霊が付与されて人間となる。神の労働を肩代わりする代わりに人間は知性と死霊を獲るのである。人間は死によって肉体は粘土に帰り、知性は神の元に返るが、死してなお残されるもの、それが死霊である。死霊は死後も冥界で生き残る。家族は死者の安穩を祈り供養を手厚く執り行なわなければならない。死者供養が十分行われない場合、悪霊となって家族に憑依し不幸をもたらすと考えられていた。

人間創造に関係する神は常に水神エンキ/エアである。エンキの取得領域は粘土を覆いとした深淵アブズ/アプスーである。このアプスーの覆いである粘土を素材として人間は創造される。木材や石材に恵まれなかったメソポタミアにとって粘土は神殿などの建造物に不可欠であったと同時に、文字と書記術の発展は粘土なしには存在しえなかった。したがって粘土はメソポタミア文明を支える必須の基盤であり、エンキ/エアが粘土をもって人間の創造に関わる十分な理由があったのである。

植物が土のなかから芽を出すように、人間が創造された(自生型)とする文学作品もあるが、これらの作品はシュメール語で書かれものに限定さ

れており、総じてアッカド語作品（セム語）の神々による人間創造（創造型）によって改変を受けたか、取って変わったといえるであろう。

注

学術雑誌等略記記号は(1) *The Assyrian Dictionary of the University of Chicago*, ed. Martha T. Roth, et. al. (Chicago, the Oriental Institute, 2005); (2) W. von Soden's *Akkadisches Handwörterbuch*, (Otto Harrassovits, 1966-1981); (3) R. Boger's *Handbuch der Keilshriftliteratur* vol. 1 (Berlin, 1967), 661-672. に準拠する。

- 1 神名リストのひとつである『アン＝アヌム』(An=Annum) による。
- 2 楔形の翻字と英訳等については、C. A. Beneto, “Enki and Ninmach” and “Enki and the World Order,” (Diss. Philadelphia, 1969)。関連文献をあげておく。S. N. Kramer, *Sumerian Mythology*. (New York, 1961), 69-71; do., *The Sumerians*. (Chicago, 1963), 149-51; J. van Dijk, “Le Motif cosmique dan la pensée Sumérienne.” *AcOr* 28 (1964), 24-30; Th. Jacobsen, *Toward the Image of Tammuz and Other Essays on Mesopotamian History and Culture*. (Cambridge, 1970), 116f.; do., *The Harps That Once…: Sumerian Poetry in Translation*. (New Haven, 1987), 151ff.; S. N. Kramer/J. Maier, *Myths of Enki, the Crafty God*. (Oxford, 1989), 31-37. *Texte aus der Umwelt des Alten Testaments* III-3. (Gutersloh, 1993), 386ff.; J. Klein, “Enki and Ninmah,” in W. Hallo ed., *The Context of Scripture* Vol. I, (Brill, 2003), 516-518.

月本昭男「古代メソポタミアの創成神話」月本昭男編『創成神話の研究』（東京，リトン，1996年），11-60頁。このテキストについては15-16頁参照。

- 3 本来2つの異なる独立した物語であった可能性がある。J. Klein は次のように捉える。第1部（1-43行）は人間の創造を手短に叙述した部分である。人は一片の粘土から創造され、女神の子宮に置かれ、そこで人は形成を得て誕生した。人は神々を苦役、とりわけ灌漑用の運河の掘削から解放するために創造された。第2部（44-139行）は人間の創造を祝う宴席でニンマハとエンキの競い合いを扱った物語である。しかし、いずれにせよこの物語の主要のテーマは人間の創造にあり、第2部は独立した物語の可能性はあるが、厳密に2つの資料に基づくとするにはテキストの保存状態が良いといえないため確定は困難である。

- 4 かの遠い日, かの遠い日,
かの遠い夜, かの遠い夜,
かの遠い年, かの遠い年, (1-3行)『ギルガメシュ, エンキドゥと冥界』など。
拙論, 「創世神話の系譜——古代メソポタミアの資料から(1)——」, 『北海学園大学人文論集』, 31号(2005), 注25 参照。
- 5 固有名称を持つ以前の原初の神々の一般的用語として用いられた。中期バビロニア期以降になるとイギグ(イギギ)神が天の神々を指す名称として使用され, アヌナ(アヌナキ)は大地ととりわけ冥界の神々を明示すようになる。
- 6 運河や河の支流の水の流れを確保するため川底に堆積する泥土を汲み上げる必要があった。
- 7 /は前方がシュメール語, 後方がアッカド語を示す。Enki/Eaは地界の清水の神で, 大海アプス(ZUAB/apsû)をつかさどる。知恵と魔術・呪文や文明と深くかかわる。拙論, 「創世神話の系譜——古代メソポタミアの資料から(2)——」, 『北海学園大学人文論集』, 36号(2007), 63-83頁参照。このテキストではエンキが人間の創造に関与する点で重要である。
- 8 engur「深淵」が文字通りの意味であり, アプスの同意語である。
- 9 原初の母と名称される。表語文字では Engru と書かれることから深遠の淡水アプスと関連する。このテキストではエンキの母とされる。
- 10 HAL-AN-KUG は apsû の同意語。J. Klein, “Enki and Ninmah,” 517頁参照。
- 11 深い悲しみや熟慮を表すしぐさ。
- 12 致命的病の悪霊としての運命。J. Klein, “Enki and Ninmah,” 518頁参照。
- 13 王宮のハーレムか。他の版では嘆きの役割が割り当てられている。
- 14 u₄-mu-ul 文字通りの意味は「わが(死の)日は遠い」である。
- 15 gig は「弱い, 病む, 邪悪な, 憎しみに満ちた」といった意味を持つ。
- 16 A. Kilmer, “Speculations on Umul, the first baby.” 265-270. in B. L. Eichler et al., *Kramer Anniversary Volume*. AOAT 25. (1976). ウムウルは gig の意味に引かれて老人とも捉られることもあったが, コンテキストから考慮するかぎり乳児と理解するほうが妥当であろう。
- 17 ウムウルはエンキの創造によるが, とりわけエンキの男根が強調されている。コンテキストから推測するとニンマハはエンキの子を宿した。A. Kilmer, “Speculations on Umul, the first baby.” notes 5.
- 18 シュメール文学においてアダミンドウツガ(adamin-du₁₁-ga)は論争や競い

合いを意味する）に特徴的なジャンルで、基本として自分こそは他者よりは勝っていることを互いに主張し合うテーマを取る。拙論、「創世神話の系譜——古代メソポタミアの資料から（1）——」、『北海学園大学人文論集』注 26 参照。

- ¹⁹ 直接障がい者に言及する法の保護は見受けられないが、一般に古代オリエントにおける法は社会的弱者にたいする保護がもられている。ハンムラビ法典のあとがきにこのような一節がある。「強者が弱者を損なうことがないために、身寄りのない女兒や寡婦に正義を回復するために……虐げられた者に正義を回復するために、わたしは私の貴重な言葉を私の碑に書き記し、……。」中田一郎『ハンムラビ「法典」』（東京、リトン、1999年）、72頁参照。
- ²⁰ シュメール語版における洪水を生き延びた英雄はジウスードラ（zi-u₄-sud-rá）で、その意味は「長くされた日（々）の命」である。また、アッカド語版洪水物語（ギルガメシュ叙事詩の11の書板）における英雄はウタナピシュテム（uta-napištim）といい、その意味は「わたしは命を見出した」である。A. Kilmer, “Speculations on Umul, the first baby.” 265-270. notes 14.
- ²¹ 現在『鶴嘴の創造』について定本は公刊されていない。本稿の翻訳は S. N. Kramer と Th. Jacobsen 等の下記の文献を参照した。S. N. Kramer, *Sumerian Mythology*, 52-53. S. N. Kramer の本書については Th. Jacobsen による書評があり『鶴嘴の創造』に言及している。Th. Jacobsen, “Sumerian Mythology: Review Article” in *Toward the Image of Tammuz*, 111-114. 月本昭男「古代メソポタミアの創成神話」、このテキストについては 16-17 頁参照。
- ²² Th. Jacobsen, “Sumerian Mythology: Review Article,” 112-114.
- ²³ 自生型は『鶴嘴の創造』の他、『エリドゥ讃歌』、『ラガシュの君主たち』等の導入部や序文に看取される。月本昭男「古代メソポタミアの創成神話」、38 頁参照。こうした自生型を認めない研究者もいる。ジャン・ボテロは植物の「発芽」「土からの出現」というシュメール語表現を「メタファー」の一つであると解する。ジャン・ボテロ 松島英子訳『最古の宗教』（東京、法政大学出版局、2001年）、160-162 頁参照。
- ²⁴ 定本や翻字等については後藤光一郎「エヌマ・エリシュ」訳者代表 杉 勇『古代オリエント集』筑摩文学大系 1,（東京、筑摩書房、1978年）、105-133 頁参照。最近の英訳としては S. Dalley, *Myths From Mesopotamia*, (Oxford, 1989), 233-277.
- ²⁵ バビロニア暦の正月にあたるニサヌ月（太陽暦 3 月から 4 月）に 12 日間にわたって開催された。行事日程の第 4 日目に大祭司が『エヌマ・エリシュ』を

朗詠する。一連の行事をとおしてバビロニアにおける王朝の安泰と民衆の繁栄を祈る。『バビロンの新年祭』日程の翻訳については後藤光一郎「バビロンの新年祭」訳者代表 杉 勇『古代オリエント集』, 197-206 頁参照。

²⁶ 後藤光一郎「エヌマ・エリシュ考」『宗教と風土——古代オリエントの場合——』, (東京, リトン, 1993年), 95-106 頁参照。

²⁷ 『エヌマ・エリシュ』の本文の引用は後藤光一郎「エヌマ・エリシュ」訳者代表 杉 勇『古代オリエント集』による。

²⁸ 神々の主権者の伝統的象徴とされ、それを手に入れることが主神になるための条件であつたらしい。それは単なる象徴ではなく呪詛的力をももっていた。『アンズ鳥』神話の一場面は天命の板をめぐる争奪を主題にしている。

²⁹ オリエント世界では一般的に動物犠牲として羊が捧げられる。特別に選ばれた聖職者が羊の頸動脈を一気に切り裂いて屠る。

³⁰ 本稿 4.5.1 『エンキとニンマハ』におけるエンキ/エアは運命を決定する神の役割を果たしている。

³¹ 定本や翻字については W. G. Lambert and A. R. Millard, *Atra-Hasis The Babylonian Story of the Flood*, (Oxford, 1970). W. L. Moran, "Some considerations of form and Interpretation in Atra-hasis," *Language and History: philological and historical studies presented to Erica Reiner*, ed., F. Rochberg-Halton (New Haven, 1987), 245-256. 日本語訳は杉 勇「アトラ・ハシース」訳者代表 杉 勇『古代オリエント集』筑摩文学大系 1, (東京, 筑摩書房, 1978年), 頁参照。最近の英訳としては S. Dalley. 'Atra-hasisi' in *Myths From Mesopotamia*, (Oxford, 1989), 9-38.

³² 一般には母なる神, 豊穡の女神, 大地母神で, 創造物語にも登場する。『アトラ・ハシース叙事詩』には, マミ (Mami), ニントゥ (Nintu), ベーレットイリー (Bēlet-ili) と名称を変えてでてくる。

³³ uppu は明らかに心臓の鼓動を意味する。

³⁴ eṭemmu については適切な日本語訳はない。英語では Ghost と訳され, ドイツ語訳は Totengist である。注 39 参照。

³⁵ W. L. Moran, "The Creation in Atrahasis I 192-248," *BASOR* 200 [Festschrift W. A. Albright] (1970), 48-56.

³⁶ 人類に送り込まれた禍を 3 回, 疫病, 旱魃, 飢饉と数えるか, 疫病と旱魃・飢饉の 2 回と数えるかで意見が分かれる。現象としては旱魃によって飢饉がもたらされると理解されるので 2 回と捉えるほうが妥当であろう。

³⁷ シュメール語で書かれた神話に『人間の誕生』がある。もっともこの作品は

後代まで書写され、アッカド語に訳されており、現存するテキストは時代的にはかなり新しい(アッシリア帝国の首都アッシュウルで発見された)。このテキストの人間創造にかかわる部分は、バビロニア風に改変が施された可能性を留保しつつも、神々の労働を肩代わりするため神を殺して人間を創るとする点で『アトラ・ハシース叙事詩』と人間観を共有している。

「天地の紐」であるウズムアにおいて

あなた方は二人のアツラ神を殺して、
彼らの血でもって人間を造るのです。

(今まで) 神々が (になってきた) 仕事は (今や) 彼ら (人間) の仕事で
ありますように。(24-27 行)

翻訳は五味 亨「人間の創造」訳者代表 杉 勇『古代オリエント集』による。

Ilawela は以前 We-ila もしくは Geštu-e と読まれた。eṭemmu と tēmu との諸関係は Ilawēla の読みにかかっている。諸説については月本昭男「古代メソポタミアの創成神話」, 41 頁参照。

³⁸ AHw: Verstand, Meinung, Initiative, Planen.

³⁹ AHw: Totengeist; CAD: spirit of the dead, ghost.

⁴⁰ ジャン・ボテロ 松島英子訳『最古の宗教』, 164 頁参照。

⁴¹ S. Dalley. 'Atrahasis' in *Myths From Mesopotamia*, notes 15, 37.